



Title	仏教国としてのロシア帝国：二つのカルムイク人社会に関する考察 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	井上, 岳彦
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第11591号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57736
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takehiko_Inoue_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 井 上 岳 彦

主査 教授 宇 山 智 彦
審査委員 副査 准教授 長 縄 宣 博
副査 教授 三 木 聰

学位論文題名

仏教国としてのロシア帝国：二つのカルムイク人社会に関する考察

本論文は2014年8月29日に提出され、同年9月3日に審査委員会が補足した。その後5回の審査委員会と、11月10日の公開口頭試問を経て、11月28日の文学研究科教授会において審査結果報告を行った。

ロシア帝国史研究においては近年、同帝国がロシア正教を奉じていただけでなく、他の多くの宗教との関係を構築していたという多宗教性に注目する研究が盛んであり、宗教共同体を単位としての臣民の管理、各宗教における「正統派」の認定、「聖職者」による権力と社会の媒介、信徒による帝国の宗教政策・制度の内面化と利用、宗教に関する学知と統治の関係といったテーマが研究されている。しかしロシア帝国の仏教徒に関しては、ムスリム地域などに比べ研究蓄積が少なく、特にヨーロッパ・ロシア南東部に住むカルムイク人については、シベリアのブリヤート人に比べ研究が少ない。しかも、スターリン時代の強制移住などカルムイク人の苦難の歴史により散逸した史料も多く、研究は困難な条件にある。

しかし本論文は、ロシア・ムスリムに関する「宗派国家」論などの影響を受けながら着眼点を工夫し、多数の文書館での調査に基づいて、ロシアの仏教政策とその変化、僧侶や貴族による統治の媒介、仏教徒のロシア皇帝像といった従来にはなかった論点でカルムイク史を描き出し、重要な貢献をなしている。同時に、ロシア・ムスリムやブリヤート人との比較、清朝の仏教徒との関係も意識しながら、仏教徒を視野の中心に据えたロシア帝国論の展開を意欲的に試みている。ブリヤート人社会にとって清朝という仏教国家との国境の存在が決定的だったのに対し、カルムイク人はヴォルガ・ウラル地域からカフカス・黒海まで広がるムスリムの連帯を断ち切る役割をロシア帝国から期待されていたことを指摘するなど、地理的・地政学的な感覚にも優れている。特に、ヴォルガ・カルムイクとドン・カルムイクのロシア帝国の政策における違い、社会や僧侶のあり方の違いに注目した点は先行研究にない特徴であり、ヴォルガ・ドン地域研究として大きな価値がある。種痘やチベット・モンゴル巡礼などの各論も、非常にオリジナリティの高い研究であると同時に、帝国医療論や巡礼論一般への広がりを持っている。

本研究によって、多宗教国家論としてのロシア帝国史研究は、仏教徒を本格的に位置づけた新たな段階に進むことができた。今後は、ロシア・ムスリムとのより具体的な比較、清朝下の仏教徒との比較、露清間などの国際関係における仏教ファクターの研究など、さらなる共同研究の可能性が開かれている。

口頭試問で審査委員会は、上述のような本論文の研究成果を高く評価すると同時に、いくつかの問題点も指摘した。特に、「ロシア帝国は仏教国でもあった」というテーゼは、その意味するところをより明確に定義・限定し、仏教僧侶の想像力の世界とロシア政府側の仏教観、常態と例外を区別しながら整理すべきである。ヴォルガ・カルムイクとドン・カルムイクそれぞれの統治構造や僧侶組織の構造と時代による変化といった、基本情報の整理・検証も必要である。申請者は10年以上にわたりカルムイク史に取り組んできたが、本論文には初期の成果は盛り込まず、本人にとって比較的新しいテーマに挑戦した部分が多いため、目玉であるはずのドン・カルムイクについての記述・分析などがやや未消化の状態にある。しかしこれらは今後の研究の中で解決すべ

き課題であり、カルムイク史研究とそれに基づくロシア帝国論として世界的にも最先端にある、本論文の画期的意義を損なうものではない。したがって、審査委員会は全員一致で、本論文は博士（学術）の学位授与にふさわしいとの結論に達した。